



川瀬俊二

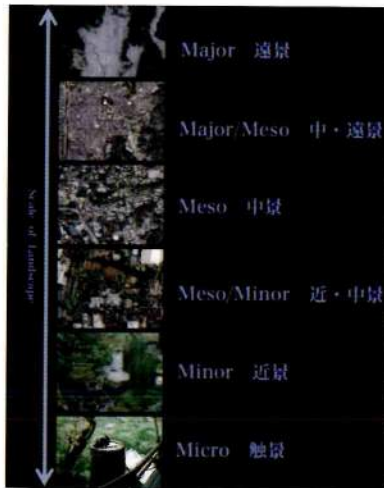
株式会社 大林組 建築本部

日本建築美術工芸協会 理事

aacaの講演会シリーズで、かねてよりランドスケープ・アーキテクトの方に講演をお願いしようと思っていました。なぜならランドスケープ設計は、建築・美術・工芸に深く関連した分野の仕事だからです。そこで、今回は国内外で活躍されている宮城俊作先生に講師をお願いしました。

講演のタイトルは「庭と風景のあいだ」です。

私たちは、遠景中景近景という言葉は記憶にあります。先生は、山水 San-Sui=Garden という概念から、そのスケールを巡って、Major 遠景 ~ Major/Meso中・遠景 ~ Meso 中景 ~ Meso/Minor近・中景 ~ Minor 近景 ~ Micro 触景と分類をし、ランドスケープの捕らえ方を分かりやすくヴィジュアルに解説されました。



Major遠景では「鴨川から北山の稜線の重なりを望む」風景が引用され、Major/Mesoでは、「京都疎水・岡崎地区から東山を望む」風景が、Major/Mesoでは、「京都疎水・岡崎地区から東山を望む」風景が、Meso/Minorで「對龍山荘の池／緑」、そしてMicroで「緑先手水鉢」などが出来て来て、私達は次第に宮城先生のランドスケープの世界に引き込まれていったのです。



京都疎水・岡崎地区から東山を望む



緑先手水鉢

近作を通じて最初の作品解説はザ・ペニンシュラ東京です。これはまさに都心に建てられたシティホテルですが、概念的に、コンパクトな空間を円形の壁により結界を創り、車回しの広場はアトランダムな形の石を散りばめた美しい水景を配し、大型バスなどがこの水景床面に直接載ることができるような機能的な工夫がされています。普段、私たちが何気なく見ているペニンシュラの玄関先に、このような設計プロセスがあったことを改めて知ることが出来ました。



ザ・ペニンシュラ東京



次に紹介されたのはザ・キャピトルホテル東急です。首相官邸の近くに建てられた、これも都心型ホテルですが、ランドスケープは、白い花崗岩の大きな敷石、自然石、池、飛び石などで、和のテイストの落ち着いた佇まいが演出されています。そして敷地境界に設計された水盤は隣地の緑を映し出し優れた借景が計画されています。



ザ・キャピトルホテル東急





宮城先生のアトリエ



宮城先生が主宰するプレイスメディアは東京小平にあります。関西にも仕事場があり、宇治のアトリエは、先生の実家のある平等院の西の軸線に位置し、平屋の住宅的スケールの中に洗練された空間が、素晴らしい環境の中に創出されています。庭に面した立面は、玄関、窓など開口を絞り、白い壁で端正な表情をしています。アプローチの敷石は、ごつごつとした自然石が無造作に置かれた素朴な感じで、これも温かみのある「Micro触景」の一つと感じました。宮城先生は奈良女子大の教授をされていますが、このアトリエには先生の個室と仕事場があります。会議テーブルの置かれた仕事場では、学生のゼミや懇親会も行われるとの事で、このような素晴らしい空間でスタディの出来る学生たちは、本当に恵まれています。



「せんぐう館」は、建築家、栗生明氏と組んで設計プロポーザルに応募し獲得された仕事です。この建物は、第62回神宮式年遷宮を記念して



創設されたもので、その理念は「20年に一度行われる遷宮を通じて、広く我が国の伝統・文化を伝え、日本人の営み、精神文化の中心にある神道の継承を目指します。」と謳われています。この課題に対し、宮城先生は、「遷宮の伝統を伝える場の顕在化」と「デザインを施した場の非顕在化」という二つの対比した概念で臨まれました。

「顕在化」では、建築～水面～宮城林の視覚的關係（汀線に沿った建築配置、水面の輪郭と広がり）、参拝者のシーケンス（屋根の視認性、透過性の高い建築とランドスケープ）に留意され、非顕在化では、景観戦略的な保存樹の選定、曖昧さを内包するディテールデザインで、見事な空間を設計され、2013年AACA賞を受賞されています。ペニンシュラやキャピトル東急では、都心のホテル空間を造り、せんぐう館では、まさに神域の崇高な空間をデザインされ、先生の創造領域の広さに改めて感心した次第です。

最後に平等院阿弥陀堂平成修理事業について、お話し頂きました。この修復は約2年間かけて行われ、柱や扉を赤茶色の「丹土」で塗り直し、瓦屋根の修復、鳳凰をはじめとする金属の装飾に金箔を施したもので、2014年4月1日より拝観が開始され、9月30日に予定されていた全ての工事が終了しました。丸太で構造材を建て、素屋根で作業場を確保し、屋根瓦の補修の様子、木工、左官作業や飾り金物や金箔の工事など大変貴重な修復のプロセスを見せて頂きました。



今、日本は2020年のオリンピックに向けてインバウンドも1300万人を越えようとしています。来訪する外国人にとっても、我々日本人にとっても、美しい日本を維持・創出していくために、ランドスケープの概念、技術が如何に重要か再認識した次第です。宮城先生、貴重な講演をありがとうございました。

